

## 古事記について (2)

### ①「古事記：国宝真福寺本。」上、中、下巻の国立国会図書館デジタルコレクション入手

その後、古事記の最古の写本である「古事記：国宝真福寺本.上」の国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1184132>、続けて同「中」(<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1184138>) )及び同「下」(<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1184140>) (いずれも 2021 年 4 月 9 日閲覧) を入手した。

### ②古事記上巻本文

古事記上巻には、「序」があるが、その要点は、本ホームページ「古事記について (1)」(以下「HP 1」)の梅原訳にある通りなので、丁寧な注釈のある三浦訳による上巻本文(三浦では「神代篇」)を主とし武光訳、梅本訳をも取り入れながら、上巻の要約を示す。

#### 天地開闢、イザナキとイザナミ、その産んだ神々、黄泉の国

天と地が出来、初めに現れた 12 神を含め高天の原に現れた天つ神たちが、イザナキとイザナミの 2 神に、「腕に浮かんだ鹿猪の脂身」のように「ただよっている地を、修めまとめ固めなされ」と言ってお前を授けことを委ねた。2 神がこの地をホコでかき回してその先からいたり落ちてオノゴロ島ができた。イザナキの、その妹イザナミへの問いに彼女は「わたしの体は成り成りして、成り合わないところがひとつところあります」と答えた。それを聞いてイザナキは「わが身は、成り成りして、成り余っているところがひとつところある。そこで、このわが身の成り余っているところを、お前の成り合わないところに刺しふさいで、国土を生み成そうと思う。生むこと、いかに」と問うた。イザナミも賛成して、試行錯誤の後、淡路島をはじめとする大八島その他の島を生んだ。この国生みの後、神々も生んだ。最期に火の神カグツチを生んだ時、イザナミは女陰を焼かれて死んでしまった。イザナキは、剣でカグツチの首を切り落とした。その時に飛び散った血とカグツチの遺体からも神々があらわれでた (3 (以上 16 ~ 26 頁)。イザナキは死んだイザナミを一目見ようと黄泉の国に妻を追っていった。イザナミは、国に帰りたいけれど黄泉の国の食事をしてしまったので、国に帰るために黄泉の国の支配者と談判をする、その間はわたくしを見ないでくださいと言って黄泉の国の宮殿には入ってしまった。長い時間が過ぎて待ちきれなくなったイザナキは、暗い殿の中でイザナミの体に無数のウジ虫が這いまわっているさまを見て、恐ろしくなって逃げだした。イザナミは、私に恥をかかせたと言って、黄泉の国の女にイザナキを追わせた。イザナキは、黄泉の国の急な坂の麓にある桃の実を投げ撃つと、黄泉の国の者は逃げ散った。最期にイザナミ自らが追いかけてきた。イザナキは巨大な石を黄泉の国の急な坂において、石の中にイザナミと対面して離婚をいわたした (26 ~ 30 頁)。

ようよう芦原の中つ国に戻ったイザナキの大神は「われは……穢らわしい国に行ってしまった……それゆえ……この身の禊ぎをせねばならむ」と言って筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原で禊ぎをした。その時に諸々の神が成り出た。水の底ですすぐ時に底津綿津見神、水の中ほど辺りですすぐ時に中津綿津見神、水の面のあたりですすいだ時に上津綿津見神が成り出た。この海の三神は、住吉神社に祀られている。

禊ぎの果てに、イザナキが左に目を洗った時に天照大見神、右の眼を洗った時に月読命、鼻を洗った時に建速須佐之男命の三柱が成り出た (26 ~ 34 頁)。

#### 天照大神・須佐之男命

この三柱のうち、他の二柱はイザナキの言う通りにそれぞれのところを支配したが、ハヤスサノオだけはおのれが委ねられた国を治めようとせず、いつまでも泣きわめいていた。そこで、イザナキの大御神は、なぜおまえに支配を委ねた海原を治めずに泣きさわいでいるのか、と問うた。するとスサノオは、わたしは妣の国である根の堅州の国に行きたいと思うのです。だからこうして泣いているのです、と答えた。それを聞いたイザナキはひどく怒って、それならおまえはこの国に住んではいけないと言って、スサノオを追放した。

それで須佐之男命は、それでは天照御大神にお願いして行くことにしよう、と言って、さっそく高天

の原に上ると、山川はみな動き国土はみなゆらいだ。それで天照御大神は「弟の須佐之男命がわたしの国を奪おうとするのであろう」と言って、武装して待ち構えて、「いかなるわけにて、上りきたるや」と、なじり問うた。須佐之男命は、わたしには、<sup>よこしま</sup>邪な心などありません。ただ父上、イザナキの大御神<sup>おおみかみ</sup>が泣く理由をお尋ねになるので「わたしは<sup>はは</sup>妣の国に行かんことを願って哭いているのです」と申し上げたのです。するとイザナキの大御神<sup>おおみかみ</sup>はおまえはこの国に住んではいけないと仰って私を追放されたのです、などと答えた。(35～37頁)。すると、アマテラスは、スサノオの心が清く明るいことをどうして知ることができるか、と言った。そこで須佐之男命は、それぞれ<sup>うけい</sup>誓約をして子どもを産んで白黒をはっきりさせようと言った。結果、アマテラスは5人の男子を生み、スサノオは3人の女子を生んだ。スサノオは、わたしの心は清くて明るく、謀反の心などない、だからわたしの産んだ子はやさしい女の子だった、当然、私が勝ったのです」と言った。アマテラスはスサノオが高天原で暮らすことを許した。スサノオは感謝したがさらに凶に乗って乱暴狼藉をした(38～43頁)。

### 天の岩屋戸

天照大御神は、責任をとって天の岩屋戸<sup>あめ いわやと</sup>という暗い石室<sup>いしむろ</sup>に引籠った。太陽の神アマテラスが隠れたので高天原も葦原中国も真っ暗になってしまった。それで困った多くの神々が何とかアマテラスを引き出そうと知恵を絞った。みんなで踊り歌い騒いだ。アマテラスが、なぜ騒いでいるのかと聞くと、<sup>あめのうずめ</sup>天宇受売は「あなた以上の尊い神がいらっしゃいますので、われわれはみな喜んで踊り、笑っているのです」と答えた。そうこうしてともかくアマテラスを岩屋から出したので、自然に、高天原と葦原中国は明るくなった。

多くの神々は相談して、このままではまずいと、この騒ぎの元をつくったスサノオに償いの品を出させ、スサノオの伸びた髭と手足の爪を切って清めのお祓いをしたうえで、高天原から追放した(43～46頁)。

### スサノオと大国主の命

追放されたスサノオは、さまよう道中で食べ物<sup>おおげつひめのかみ</sup>を大気津比売神に求めた。オオゲツヒメは、鼻や口、尻から種々のおいしい食べ物をつくってもてなしたが、スサノオは、汚いことをして料理をさし出すと思って、オオゲツヒメを殺してしまった。殺されたオオゲツヒメの頭から蚕、目から稲の種、耳から粟、<sup>あずき</sup>鼻から小豆、女陰から麦、尻から豆が生まれ、その体はすべて植物となった(48～49頁)。

スサノオは、<sup>いずも</sup>出雲の国<sup>ひのかわ</sup>の斐伊川のほとりの鳥髪というところに降りた。その時、<sup>はし</sup>簀が流れてきたのを見て川上に人が住んでいるはずだと思って流れをさかのぼって行くと、老人と老女が少女を中にして泣いていた。訳を聞くと、老人は娘は以前は八人いたが、<sup>こし</sup>高志の八岐大蛇<sup>やまたのおろち</sup>が毎年やってきて食べてしまった、いま、また八岐大蛇がやってくるときなので泣いている、と言う。スサノオがさらに尋ねると、オロチは身体一つに八つの頭と八つの尾があり、長さは谷を八つ、山の尾根を八つ渡るほど大きい、などと言う。スサノオは策を説いて、オロチに強い酒を沢山飲ませて酔って動けなくなったところを、腰に佩いていた<sup>とつか</sup>十束の劍<sup>つるぎ</sup>でオロチを斬り刻んでしまった。